～長引く咳は赤信号　過去の病気ではありません～

「結核」に注意！

■　結核は、今も全国で年間23,000人の患者が報告されています。山形県でも毎年130人を越える方が新たに結核と診断されています。

■　結核は怖い病気ではありません。早期発見、早期治療で治る病気です。「結核だからうつる」は間違いです。
正しい知識を持って、結核をしっかり予防しましょう。

結核とは？

結核菌によって起こる病気です。

◆症状（身体にどんな変化が起こるか？）

咳、痰、発熱などの風邪によく似た症状で始まります。２週間以上咳が続いていたら、医療機関を受診しましょう。結核の症状には、このほかにも、痰に血が混じる、食欲が減る、体重が減る、微熱が続く、などがあります。

◆感染経路（どのように感染するか？）

患者が咳やくしゃみをした時に結核菌が空気中に飛び散り、それを肺の奥まで吸い込むことで感染します（空気感染）。結核は、握手や食べ物、食器等を介して感染することはありません。

感染と発病

結核菌に感染したからといって、必ず結核になるわけではありません。

◆感染

病原体が身体の中に侵入し定着することを言います。結核の場合は、結核菌が肺の奥まで入り込み、肺などの組織に潜んでいる状態です。

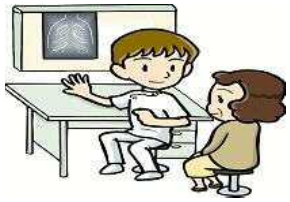
◆発病

結核菌が体内で増殖し続け、肺などに明らかな病巣を作って、咳、痰などの症状が出る状態です。

◆感染から発病までの期間（潜伏期）

感染しても、からだの中の抵抗力（免疫）によって菌の増殖が抑えられるため、発病する方は 10 人に１～２人と言われています。

発病する場合の潜伏期は他の感染症に比べて長く、多くは感染後数ヶ月～２年以内です。ただし、数十年後の発病もあり、最近の高齢結核患者の多くは、若い頃に感染して肺の中に潜伏（休眠）していた菌が、抵抗力の低下などにより（長い眠りから覚め）増殖を開始して発病したものと言われています。



発病していない人（患者さんの家族を含む）が他の人に感染させることはありません。また、結核の患者さんでも、薬をきちんと飲めば、感染性は２週間程度でほとんどなくなります。

偏見を持たず、安心して治療ができるよう支えてあげましょう。

結核の検査方法

結核の検査には、感染したかどうかを調べるものと、発病したかどうかを調べるものがあります。

【感染したかどうかの検査】

■ＱＦＴ検査

・少量の採血を行います。
血液中のインターフェロン・ガンマ（IFN-γ）という物質を測定して、感染しているかを判断します。

■ツベルクリン反応検査

・ 腕の皮膚表面（皮内）にマメを作るように検査液（ツベルクリン液）を注射し、２日後に発赤の大きさなどを測定します。

【発病したかどうかの検査】

■胸部レントゲン検査

・胸のレントゲン写真をとり、肺の病巣をみます。

■喀痰検査

・痰を複数回採取し、結核菌の有無を調べます。

結核の治療方法

抗結核薬と呼ばれる複数の薬を６～９ヶ月服用して治します。
治療で大切なことは規則正しい服薬です。結核と診断されても、毎日きちんと継続して服薬すれば治ります。

結核を予防するには？

■２週間以上咳が続くようなら、医療機関を受診しましょう。
■小児では、重症結核になりやすいので、予防として、ＢＣＧワクチンの接種を生後６ヶ月までに受けましょう。
■職場や住民検診で胸部レントゲン検査を定期的に受診し、異常を指摘された場合は、速やかに医療機関を受診しましょう。

「けっかく」のはなし

・結核の歴史は古く、ドイツで発掘された９，０００年前の人骨から結核特有の病変が確認されるなど、人間の歴史とともに存在していました。
・結核の新たな患者数は、世界で９４０万人と推定され、マラリア（２億２，５００万人）、エイズ（３，３３０万人）に次ぎ、「世界三大感染症」と呼ばれています。
・インド、中国、インドネシアなど近隣アジア諸国でも患者が依然として多く報告されていますが、日本では減少傾向が続いています。
・しかし、かつて感染した方が高齢により抵抗力が弱くなって発病するなど高齢者が結核を再発するケースが問題となっています。

結核を正しく知る、自分や周囲の健康を気遣う、
それがまん延防止の第一歩です！

山 形 県